

小野寺淳・平井松午編

『国絵図読解事典』

創元社 2021年2月 318頁 8,800円＋税

本書は川村博忠氏から始まった国絵図研究のこれまでの成果を網羅し、国絵図に関心を寄せる人たちに国絵図を読み解く楽しさを伝えることを企図して編纂された事典である。その構成は総論篇と各論篇の二部に分けられ、総論篇は全24章（他にコラム3）、各論篇は全26章（他にコラム6）になっている。大きく紙幅を割くことになるが、本書の内容全体を示す意味で目次を紹介すれば、以下の通りである。

総論篇

- 1 江戸幕府による国絵図・日本総図編断事業
- 2 織豊期の越後国郡絵図—越後国瀬波郡絵図・頸城郡絵図
- 3 江戸幕府撰国絵図の多様な地図仕立て
- 4 江戸幕府撰の日本総図
- 5 国絵図と日本図のはざま“寄絵図”—江戸初期の奥州図・九州図・四国図
- 6 六十余州図—関東を中心にして
- 7 国絵図記載の石高と郷帳
- 8 道帳と国絵図
- 9 国絵図と料紙
- 10 国絵図の方位表記と凡例
- 11 国絵図の彩色—色の質感にみる江戸の美意識
- コラム1 国絵図の作成費用
- コラム2 江戸幕府撰国絵図・日本総図関連年表
- 12 国絵図の測量と歪み
- 13 国絵図と城絵図
- 14 正保国絵図と元禄国絵図のはざま—寛文期の上野国絵図
- 15 国絵図作成のための領内図
- 16 元禄国絵図改訂に関する絵図元の記録—仙台藩の場合
- 17 毛利家文庫収蔵の防長両国絵図—「加文」要請前後における2様の元禄度国絵図
- 18 国境縁絵図と海際縁絵図—周防・長門両国を中心に
- 19 阿蘭陀流町見術と元禄日本図の描写
- 20 享保日本図と望視方法
- 21 天保国絵図改訂事業—弘前藩・盛岡藩を事

例に

- 22 蝦夷地像の変遷と蝦夷図
- 23 「琉球国絵図」と「琉球国変地改目録」—悪鬼納から沖縄へ
- 24 国絵図研究の歩みを俯瞰する—19世紀から21世紀へ
- コラム3 飢肥藩領国絵図にみる寛文2年「日向灘地震」

各論篇

- 25 江戸幕府撰国絵図以前の国土図
- 26 大名家所蔵の国絵図—岡山大学池田文庫
- 27 八ヶ岳扇状地の開発と国境記載
- コラム4 寛文7年土佐浦々国絵図
- 28 国絵図と山論—陸奥国の国境・郡境
- 29 国絵図にみる街道と古城の表記—近世初期の阿波国絵図にみる領国支配
- 30 国絵図・日本総図にみる舟路
- 31 国絵図にみる災害—慶長豊後地震の被災地「かみの関」の比定
- 32 国絵図にみる信仰—とくに寺社と霊山の描写について
- 33 国絵図に描かれた被差別「村」
- コラム6 国絵図調査のマナー
- 34 正保度の領内図にみる植生表現—庄内地域の自然環境
- 35 国絵図にみる「大坂川口新田」の開発—元禄・天保摂津国絵図の比較分析
- 36 絵図にみる海洋現象「鳴門の渦潮」—海の難所から名所へ
- 37 写される国絵図—手書き彩色常陸国絵図を事例に
- コラム7 森幸安と国絵図
- 38 刊行された国絵図
- 39 国絵図と名所図会—河内国を事例に
- 40 「改正日本輿地路程全図」と国図
- 41 伊能忠敬と国絵図
- コラム8 沿海浅深絵図「淡州海灘之図」
- 42 シーボルト本の手書き彩色国絵図
- 43 「針図」と「琉球国之図」—乾隆大御支配（元文検地）による測量事業
- 44 実測国図・郡図の登場—伊能忠敬と地方測量の波及効果
- 45 幕末の絵図に描かれた因伯二国の台場—「因

- 伯両国海岸調査絵図」と「御両国之図」
- 46 明治期における国絵図の利用—府県境，国
界，郡界を中心に
- 47 明治の城絵図「陸軍省城絵図」
- 48 絵図を利用した「地理総合」の授業の提案—
下総国絵図を事例に
- 49 国絵図の撮影
- 50 国絵図の展示
- コラム 9 国絵図研究会の歩みと活動
- 古地図・絵図の公開について考える—被差別身分
呼称の問題について
- 【付録】
- 参考文献ならびに国絵図関連文献一覧
- 国絵図・古地図関連サイト
- 国絵図関連新聞記事一覧

本書の記述によれば総論篇は「作成時期の異なる多様な国絵図の編成・作成過程を絵図や関連文書を織り交ぜて解説」するもので、国絵図を読み解くために欠かせない知識を学び、正しく理解するために設けられた部分である。総論篇は「1 江戸幕府による国絵図・日本総図編纂事業」から始まり、慶長度・寛永度・正保度・元禄度・天保度、それら間の寛文度の国絵図調製（上野国）・享保度の日本総図編纂といった話題を加えながら、ほぼ時系列的に国絵図および日本総図の編纂事業が解説されている。

一方、各論篇は「国絵図の表現上の特徴」に焦点を当て、「同時代の古地図・絵図との関連性」を視野に入れて項目を立てたものである。国絵図を読み解く楽しさを伝えるという本書の目的から言えば、各論篇がその大きな役割を担うことになる。実際に、国絵図に記載された国郡境や街道・舟路、災害、信仰、被差別「村」、植生、新田開発、海洋現象等が取り上げられている。また、「同時代の古地図・絵図との関連性」から筆写された国絵図や刊行国絵図、名所図会、伊能図、検地絵図といった多様な絵図が話題に上り、近代における国絵図の利用、さらに現代における「地理総合」授業、国絵図の撮影・展示・アーカイブ化といったように歴史的な遺産である国絵図の利用まで、さまざまな角度から項目が立てられ、バラエティに富んだ内容構成になっている。

国絵図に関する基本的な知識と正しい理解のう

えに読解の楽しさがあるという基本的な姿勢に基づく二部構成は、事項単位の解説を五十音など定型化された順序にしたがって配列する一般的な事典とは明らかに異なっている。この点が本書の大きな特徴であり、評価されるべき点であろう。しかし、そうであればこそ、本書の構成や内容について綿密な計画が必要であったと思われる。以下、とくに総論篇について各章・コラムの配列に関する事項を二点、国絵図そのものの理解に関わると思われる事柄を一点、指摘しておきたい。

第一点は各章とコラムの配列についてである。例えば、「コラム 2 江戸幕府撰国絵図・日本総図関連年表」(77頁)は天正18・19(1590・91)年の豊臣秀吉の天下統一および御前帳・郡図の調進命令から始まり、明治6(1873)年の江戸幕府収庫の国絵図・日本図、伊能図、『皇国地誌』編纂資料の焼失まで280年余りにわたる事項を整理した年表で、各論篇で取り上げられた話題の一部を含んでいる。国絵図・日本総図と関連絵図の作成に歴史的な展開を示すという意味で本書の総論篇にとって重要な役割をもっていたと思われる。しかし、その年表が総論篇「1 江戸幕府による国絵図・日本総図編纂事業」(10~13頁)と切り離されて掲載されているだけでなく、「1 江戸幕府による国絵図・日本総図編纂事業」の文章中にもこの年表を意識した記述は見当たらない。こうしたことから、コラム2の年表がその役割を十分にはたしているとは思えない。コラムの配置に関する問題はコラム3、コラム6、コラム9などでも指摘できる。国絵図ならびに関連絵図の理解を促す上では、コラムの配置に配慮が必要ではなかったかと思われる。

第二点目は総論篇24章の配列に関わる問題である。総論篇の24章はその内容から国絵図および日本総図の作成に関わる事項、測量技術に関わる事項、そして料紙や彩色といった史料論(史料学)的な事項に大別できる。『国絵図の世界』(2005, 柏書房)では日本各国の国絵図類を紹介することに重点が置かれていた。また国絵図に特化したものではないが、『絵図学入門』(2011, 東京大学出版会)においては史料論、測量史からの記述が盛り込まれていた。本書の内容もこれらの成果を受け継いだものということができ、総論にふさわしい内容構成になっていると評価できる。し

かし、先に挙げた三つのカテゴリーがとくに整理されることなく、入り混じったかたちで配列されている。国絵図・日本総図作成の歴史的展開の中に史料論・測量史に関わる事項を位置づけることを企図した配列とも考えられるが、カテゴリーごとにまとまりをもたせた方が分かりやすい内容になったのではないと思われる。

第三点目は本書の特色の一つである豊富な図版(カラー版)に関することである。確かにカラー図版を数多く掲載したことは、国絵図への関心を刺激する一つの手段として有効であるだけでなく、各章の記述内容を理解するうえでも大きな助けとなる。しかし、本書に掲載された図版の多くは日本各地の図書館や資料館・博物館等に所蔵されてきたもので、幕府が最終的に作成し、完成させた絵図(清絵図)ではない。もちろん慶長度や正保度の国絵図のように清絵図の現存が確認できず、掲載が不可能なものもあるが、元禄度・天保度の国絵図が国立公文書館に所蔵されていることはよく知られている。たとえ清絵図が現存していなくても、清絵図に近いと判断された絵図もいくつかは知られている。こうした国絵図の現存状況と本書の目的を考え合わせれば、総論篇で掲載する国絵図は国絵図の作成の過程で諸大名が作成した絵図やその写しだけではなく、江戸幕府が収庫した完成した絵図(清絵図)あるいはそれに近い絵図をきちんと示しておくべきではなかったのだろうか。幕府が収庫した完成図(清絵図)がどのようなものであったか分からないままに、諸大名の手になる絵図とその解説に依存して各度の国絵

図の作成過程を説明することが果たして国絵図に関する正しい理解を進めることになるのかどうか、諸大名が作成し、伝存してきた絵図を多用することで幕府が求めた国絵図のイメージがゆがめられる恐れはないのだろうか、そんな危惧を抱かざるを得ない。

以上、ここまで書き連ねてきた三点からみれば、やや厳しい評に終始した感がある。しかし、それらは決して本書の所期の目的を損なっているということではない。むしろ、所期の目的をより十分に達成するために必要であったろうと思われた点を列挙したものである。すでに述べたように本書は国絵図になんらかのかたちに関わってきた研究者たちの長年にわたる研究の成果を集約したものである。したがって、本書には国絵図および関連絵図に関する現在までの研究状況が如実に反映されていると言ってよいであろう。その意味で、本書は、単に国絵図に関する知識を集成したもので終わらず、国絵図に関心を抱く人たちにとってみれば現在の研究状況をつぶさに俯瞰できるものにもなっている。筆者も、多少なりとも国絵図研究に関わってきた一人であるが、本書の通読を通して国絵図研究の進展を実感する一方で、これまでの国絵図研究に不十分な点があること、あるいは置き去りにしてきた点があることをあらためて認識させられている。本書は国絵図に関心を寄せる人たちに向けて刊行された事典であるが、研究者にとっても国絵図研究の研究状況を俯瞰できるという点において有意義な一冊であったと言えよう。

(渡邊秀一)